



FLOW vol.1

桜乃 友



『自分のドッペルゲンガーを見ると、死んじゃうって話し知ってる？』

『ドッペルゲンガーって何？』

『自分の分身。自分とまったく同じ姿をしているんだって。』

『自分に似てる人って、三人いるって言うよね。』

『それはドッペルゲンガーじゃないよ。』

『でもさー、その似てる人に会ってみたいと思わない？』

『えーやだー、ちょっと怖いよー』

第一章 春香

カーテンの隙間から、朝日が差し込む。そのまぶしさに目が覚める。

頭が痛い。体もだるい。目覚めたくないのに目覚めてしまう朝。

「生きてる……」

春香は傷だらけの手首を見てつぶやいた。一番新しい傷からは、血が流れた痕が残っている。

ベッドのシーツは、その血を吸った部分が、赤黒く変色していた。

そんな、変色した部分は、ベッドのところどころにあった。

貧血気味の真っ白な、14歳という年齢の割に、痩せて小さい体を起き上がらせ、立ち上がる。

肩までの長い髪は、手入れをされることもなく伸びきっている。

フラフラする。

まだ目の冷め切っていない冷えた体を起こし、左手首に残された無数の傷跡を見つめる。

折り重なるように出来た無数の傷。

一つ一つは深くはないものの、腕を動かすとやはり痛む。

「傷の痛みなんて、すぐに癒える……」

自分に言い聞かせるようにつぶやくと、ゆっくりと立ち上がり、すぐにパソコンに向かい電源を入れた。

誰にも内緒で書いている、パソコンの中の自分の秘密の日記。

『また今日も目覚めた。もっと深く切れれば、首の動脈でも切ってみれば、確実に死ぬるかもしれない。

死にたくはないけれど、生きていたくもない。どうして私は存在しているんだろう。』

毎日同じような事を書き連ねている。

私は勉強が好きだった。進学塾などには行っていなかったけれど、クラスでは優秀だった。

「俺は学がないのに、春香はすごいな。」

と言うのが父の口癖だった。

父と母にとっては、そんな優秀な娘が自慢で、そしてとても期待されていた。

私自身は、褒められるのがただ嬉しくて、それを重荷に感じた事もなかった。

中学は、家の近くの私立中学を受験した。

わりとお金持ちのお嬢様が多く、うちのような中流家庭は少なかったけれど、

それでも公立にはない授業カリキュラムに惹かれたし、

中高一貫の進学校で、レベルの高い中で自分がどれだけやれるかチャレンジしてみたかった。

そしてなんと言っても幼稚園の頃からの親友、亜由美が一緒だったので、悩むことなく入学を決めた。

でもそれは浅はかだったのだ。

人には分不相応と言うものがある。それに気付かなかった。

亜由美とはクラスが離れてしまったものの、行き帰りは一緒だったし、一緒に勉強もしていた。クラスのお嬢様たちの、別荘や海外旅行等の話題には、まったくついていけなかったけれど、勉強では引けをとらなかったし、普通にクラスにもなじんでいた。そう、あのときまでは……

夏の始まりとともに行われる学期末のテストの結果が、廊下に張り出された。

「春香すご〜い！一番じゃん〜」

亜由美は、お昼に張り出された結果を見て、おおはしゃぎで私の教室に飛び込んできた。

「今回、お店の手伝いで、あんまり勉強できなかったから、だめかと思ってた〜。」

私は亜由美のはしゃぎように、ちょっと照れくさくなり、沈めるように小声で言った。

私の両親は小さな洋食屋を経営していて、小さいながらも繁盛していた。

この学校に入学した頃から、朝のモーニングサービスも始めて、さらに忙しい両親のお店を手伝うことが多くなっていた。

手伝いをすることで、成績が下がり、両親が残念な顔をするのが嫌で、実際は勉強は、いつもよりも頑張っていた。

それが功を成して、学年トップになれたのだ。

私は帰ってから両親にどんな風に報告しようかと、少し浮かれていた。

そのとき、私の席の方に伊坂香澄が近づいてきた。

「中学生がバイトなんてしていいの〜？」

小声でお店の手伝いと言っていたのが、彼女の耳に届いていたようだった。

香澄の家は、祖父が有名大学病院の院長、父親が医師というお金持ち家庭。

美人で才女で、彼女の周りにはいつも人が集まっていた、

クラスのリーダー的存在だった。

多額の寄付金を収めているらしく、母親はPTAの会長。

当然学校側からも一目置かれた存在だった。

「バイトじゃなくて、家の手伝いな。うち、洋食屋だから。」

そう答えたが、ふうん〜と受け流されてしまった。

「学年トップおめでとう。」

そう言うと、香澄は席に戻っていった。

今思えば、それが始まりの合図だったのかもしれない。

お嬢様の中の一般人、うまく生きていくには、ひっそりとおとなしくしていくべきだったのだ。

次の日の朝、学校へ行くと、私の机に花瓶が置いてあり、仏壇用の花が飾られていた。俗に言う、いじめというやつだ。

それは次第にエスカレートして行き、お弁当の中に墨汁をいれられたり、机の中に、虫の屍骸が大量に入れられた。

教壇に置かれた汚れた雑巾は、私が置いた事にされ、かばってくれる人は誰もいなかった。先生から呼び出され、そのときに身の潔白を説明するも、

「あなたは、自分がやった事を、他の人のせいにするの？
謝る事を知らない子は、ろくな大人になれないですよ？」
聞く耳も持ってくれなかった。先生からの評価も、ものすごく下がった。

勉強が出来てはいけない。そう悟った私は、期末の答え合わせ授業で間違った答えを書いた。すると、あの学年一番は、カンニングだったのだと騒がれた。

だけど、亜由美だけは、春香はそんなことしないよ〜と、いつも味方をしてくれた。わかってくれる人がいる。だから、どんな目にあっても、耐えられた。

でも、友情なんて、もろく壊れやすい。
数日後、トイレで聞いてしまった。亜由美の言葉を。

「春香ってバカみたい。あんなにいじめられて、よく学校これるよ。
私だったら、もう、しんじやいたくなるかも。」

ショックだった。亜由美はわかってくれていると思っていた。

『うん……そうだよ。生きていたくないよ。学校も行きたくない。』
生きる事をもうやめよう。

親友の一言は、そう思わせるのには十分な言葉だった。
だけど死ぬのって難しい。自分の命を自らたつって怖い。
でも生きるのも辛かった。何もできない無気力な日々が始まった。
家から出る事も出来なくなり、学校にもいけなくなった。

両親を悲しませたくなくて、いじめられていることは言えなかった。

両親は学校に呼び出され、急に生活態度が悪くなった事を担任に責められたらしい。
父は私を叱り、母は泣いた。

だけど、私には、飲み込むだけで、発する言葉がもうなかった。
大好きだった父の作るオムライスを食べると、吐き気がするようになった。

程なくして夏休みに入り、一日中部屋にこもっている私に、両親はかまわなくなってきた。食事も、両親が出かけた後に、こっそり食べる。

始めは作って置いてあったけれど、両親に作られたものを食べる事は出来なかった。

どうしても胸がつかえて吐き出してしまう。

親子の絆も、もろく壊れやすい。

何もかもが、こんなにもろい世界で生きてきていたのだ。

立っているだけでフラフラする。自分が立っている足場さえ、ものすごく崩れやすく感じて、足を踏み出すのが怖くて、まっすぐ歩くことさえ出来ない。

そんな私の毎日の日課は、起きてすぐ、生きている事をパソコンの中の自分に報告する事。

どこでも良かった。吐き出したい思いを吐き出さなければ、この自分のいる世界と言う大きな海の底で、

溺れ続けている感覚だった。苦しくて息も吸えない。もがいても抜け出せない。

自分がどこを向いているのか、方向感覚さえもない。暗い暗い海の底。

パソコンの中の自分は、唯一そんな私をわかってくれる場所で、唯一私と同じ気持ちでいてくれた。

傍から見たら、それは鏡の中の自分で、自分の書いた文字の羅列を、自分で読んで慰める、滑稽な情景だろう。

だけど私にはそれが必要だった。

このもろく崩れ安い世界の中でたった一つ信じられる、たった一人の自分…。

ピ…ピピ…

今日は、耳障りな音で目が覚めた。

規則的に鳴る電子音。

目覚まし？ううん、目覚ましなんてかけるはずがない。

ボーっとした頭で、音のするほうを見ると、パソコンが光っていた。

え…？

ゆっくりと起き上がり、光っているパソコンを見ていると、白い玉のようなものが出てきた。

その玉はふわふわと宙を踊りながら私の前に止まった。

『世の中には、顔かたちなどがそっくりな人間が三人いるという。

その三人が同時に出会ったとき、四人目のドッペルゲンガーと呼ばれる影が現れ、

それぞれの願いを叶えると言う。あなたはドッペルゲンガーを探しますか？』

玉から声がする。

なんだこれ…？ 夢？

願いを叶えてくれるなんて、おとぎ話のようだよ。

『ドッペルゲンガーを探しますか？』

玉からまた声がある。

よくわからないけど…夢なら探しますって言うのが妥当かな…

「はい。探します。」

『5つの鍵のかけらを集めなさい。全部集めれば、あなたの扉が開きます。』

玉はそれだけ言うと消えてしまった。

鍵…。家の鍵？車の鍵？ロッカーの鍵？なんだろう…

そのとき、部屋のドアを叩く音がある。

「春香ちゃんに、お手紙が届いているわよ。」

母がドアの向こうで言う。私の返事を待つ母の気配がある。

でも、いつもの通り、飲み込んだままの言葉は、声を奏でない。

母の気配が消えるのを待って、扉をそっと開けると、差出人の名前に鍵と書いてある手紙が置いてあった。

鍵さん??

封を開けると、一枚の紙が入っていて、そこには、

-あなたを思う5人の誰かさん-

とかかれていた。

その人が鍵を持ってるって言うことかな？ 私を思ってくれている人なんて、どこにいるのよ…

春香は苦笑した。

日課を忘れていた事を思いだし、パソコンの電源を入れようと手を伸ばすと、

傷だらけの手首が視界に入る。

それを隠すように包帯を巻くと春香は部屋をでた。

私を思う人か…。

物語的に言えば、白馬に乗った王子様あたりが現れるのかしら…。

第二章 想い

日中の家の中は、いつもと同じく静かだった。

時計の針は11：30を指していた。

お昼のランチタイムが始まる頃だ。両親はお店で忙しくしているであろう時間だった。

裏口から外に出ると、一階のお店の脇に出た。

店の正面には、看板とその前の小さなケースには、

その日のランチメニューの見本が飾ってあった。

黄色いふわふわの卵がのったオムライス。父の自慢の料理だった。

春香はそれが大好きだった。

悲しい事があったとき、嬉しい事があったとき、

父はいつもそのオムライスを作ってくれた。

ほんのり甘いふわふわのその卵を口に入れると、

嬉しい事はさらに嬉しく、悲しい事はまるで雪が溶けるようになくなり、

ほかほかした温かい気持ちになった。

「いつから食べてないだろう...。」春香は呟いた。

亜由美の言葉を聞いたあの日、泣きながら帰ってきて部屋に閉じこもった私に、

父が作ってくれたオムライス。

口に運んでもどうしても飲み込むことが出来なかった。

無理に飲み込もうとした瞬間、嘔吐してすべて吐き出してしまった。

その時の父の悲しそうな顔が目に焼き付いて離れない。

母は、どうしたの？春香ちゃん？と、泣き出しそうな顔で何度も聞いた。

その時の母の悲しそうな顔が目に焼き付いて離れない。

そんなことを考えながら、お店に入ってランチを食べ、出てくる人達を眺めていた。

みな、にこやかに満足そうな顔をしていた。

ピーク時には何人もが列をなして道路まで並んでいたが、

時間がたつごとにそれも少なくなっていき、最後のお客さんが外に出た時、

母が看板をしまうために外に出てきた。

目が合ってしまった。

「いらっしやいませ。まだ大丈夫ですよ。」

にこやかに私に声をかけてきた。

あれ？私がわからない？

ああそうか、夢だからか。

そして私は、なんとなく誘われるまま、お店に入った。

久しぶりにに入ったお店は、なんとなく雰囲気が違うような気がした。

「ランチでよろしいですか？」

母にきかれた。私は静かにうなづいた。

厨房では、山になった食器を片づける父の姿が見えた。

でも、どことなく雰囲気違って見える。

その時、壁にかかっていたカレンダーがふと目に留まった。

『2004年8月』 ああ、過去の夢なのか…。

8年前だった。父や母の雰囲気が違って見えたのも、今より少し若いからなのかもしれない。

お店の中も、新しくする前のテーブルや椅子なので、今と違って見えたのだろう。

私は過去のお店の夢を見ているようだった。

お店の中を見回すと、そこここに、私の書いた両親の絵や、

父や母の誕生日等に贈った記憶のある、作品が恥ずかしげもなく置いてある。

「これね、娘が作ったんですよ。」

母が話しかけてきた。

「これはね、私の誕生日に折り紙で作ってくれたお花なんです。

どんな豪華な花束よりも、最高に嬉しいプレゼントだったんですよ。」

楽しそうに、陽だまりのような笑顔を浮かべて母は話した。

すると料理を作り終えた父が、カウンターに並べながら話に割り込んでくる。

「こっちの絵は、娘が5歳の時に、父の日のお祝いで書いてくれた絵なんだ。

5歳にしちゃ才能があると思わないか？色もはみ出さずに塗ってるだろ？」

と、自慢げに話す。

「春香ちゃんは工作の才能もあるわよ〜。」

恥ずかしげもなく娘自慢を繰り広げる両親は、とても幸せそうに見えた。

こんな幸せそうな両親の顔を、ずいぶん久しぶりに見た気がした。

何も話さなくなった娘、手首の傷が増えていく娘、部屋に閉じこもりっきりの娘。

その娘を見る悲しそうな顔しか近頃の記憶にはなかった。

はじめて私が手首を切ったのは、亜由美の言葉を聞いた二日後だった。

二日間何も食べれなくて、ベッドに横たわったままでいた。

娘がそんな状態でも、両親はお店を開けた。

家の中は静まり返って静かだった。

自分と言う存在感がなかった。

今私が死んでも、誰もきづかない。

私一人が消えても、時間は普通に進んでいく。

そんなことを考えながら、ぼーっとした目でまわりを見渡した時に目に留まったのが、

机の上に置かれたペン立ての中のカッターナイフだった。

衝動的だった。

ベッドから起き上がり、カッターを掴んだ。

何のためらいもなく、手首で刃を引いた。

痛みとともに、まるで生き物のように血が湧き出てきた。

しばらくそのあふれてくる血を見ていた。

だんだんと眠くなり、ああもう目覚めることはないのか...と、

なんとなく思いながら目を閉じた。

でも、そんなに傷は深くなく、薄暗い部屋の中で、切ったその時と同じ状態で目が覚めた。

手首や床や服に、赤黒く固まった血がたくさんついていて、

口の中は切れていないのに、なんとなく鉄っぽい血の味がするような気がした。

そのまままた手首に刃を滑らせ布団に入った。

目が覚めたのは病院のベッドだった。

泣きはらした目の母の顔を最初に見た。ゆっくり起き上がるなり、父に頬をはたかれた。

生まれて初めて、父に叩かれた。

その後みんなが何か言っていたけれど、何を言ってるのかさっぱり聞き取れなかった。

ずんずんと響くような頭痛がして耳鳴りがしていた。

過去のことを思い出しながらうつむいていると、

出来上がったオムライスとカップスープとサラダが私のテーブルに運ばれてきた。

私は息を飲んだ。

父の作ってくれたオムライス。どうしても飲み込む事が出来ないオムライス。

食べれるだろうか...

ふわふわの卵に、スプーンで小さく切り込みを入れ、恐る恐る口に運ぶ。

ふわっとほんのり甘い温かい卵が口に優しく広がる。

そのまま、のど元を流れていく。食べられた。

涙があふれてくる。

母がそれを見て、びっくりしたように近づいてくる。

「熱かった？おいしくなかった？」

心配そうにのぞきこむ。

「お・・・いし・・・いです・・・」

そう答えた後、胸が苦しくなった。

何度涙をぬぐっても、溢れ出してとまらない。

その時、手首に巻かれた包帯がはらりと落ち、傷が露わになった。

母は包帯を拾い、私の手をそっと取り、手首にその包帯を丁寧に巻き始めた。

「お母さんやお父さんも痛いよ。」

母は言った。

私は自分の心臓がドクンと大きな音を立てたような気がした。

母の顔を見れなかった。

「自分の子供がね、痛かったり苦しかったりすると、お母さんやお父さんも痛くて苦しいのよ。」

母は続けて言った。

「子供が痛かったり苦しかったりすると、何とかしてあげたいって思うのよ。

痛みや苦しみを取ってあげることはできなくても、それでも、代わってあげられたらって思うのよ。

体だけじゃなくてね、心が痛いときもね、代わってあげられたらって思うのよ。

一緒に苦しんであげられたらって思うのよ。」

春香は黙って聞いていた。

代わって欲しいなんて思えない。こんなに苦しいのに両親が同じように苦しむなんて耐えられない。

だからそれを知られたくなくて、苦しいって言えなかった。

助けてなんて言えなかった。

「もしも...」

巾帯を巻き終わると、母はそっと春香の手を握り締めて話し続けた。

「もしも苦しんでいるのがわかっているのに、助けてあげられなかったり、それをわかってあげられなかったら、一緒に苦しむ事よりも、もっと苦しいのよ。」

そういわれた瞬間、心の中を見られたようで、ドキッとした。

父と母は、この傷を見て、どう思っていたんだろう。

なんであんなに悲しそうな顔をしていたんだろう。

なんであんなに苦しそうな顔をしていたんだろう。

考えれば考えるほど、自分の勝手さだけが浮かんでくる。

勝手に体を傷つけて、自分だけが苦しい、痛いと思い込んで、

それを見た時の親の気持ちなんて考えたことがなかった。

見も知らぬ人に、自分の娘の自慢をしてしまう位に、大事にされていたのに。

勝手に殻に閉じこもって、すべての不幸を背負ったような顔をしていたのは私の方だ。

目が覚めたらまず両親にきちんと謝ろう...

そう思って立ち上がったときにはっとした。

お金持っていない...

「あ、あのごめんなさい！お財布持ってくるの忘れちゃって。

でも絶対持ってきます。あとで必ず持ってきます。」

そういうと、奥の厨房でずっと黙っていた父がにっこりと微笑んで、

「出世払いだな。」と優しく言った。

「ありがとうございました！」

春香は深々と頭を下げると、お店の外に出た。

はずだった。

店のドアを開けると、真っ白な空間が広がっていた。

え？っと思い振り向くと、お店への扉も消えていた。

代わりに、少し離れた所に、石でできた大きな扉のようなものがあった。

と同時に、上から何かが落ちてきた。

チリン～。

澄んだ鈴の音がした。

赤と青の直径5 cmほどの小さな球体だった。

ころころと転がり春香の足もとで止まった。

春香はそれを拾いあげた。

その時どこからか声がした。

『見つけましたね。』

振り向いたが誰もいない。辺りを見回しても、人影はなかった。

まるでこの空間が話しているような、どこから聞こえてるのかわからない不思議な声。

『それが鍵です。』

目を丸くして、辺りを見回し続ける。

『私には実体はありませんので、探してもみつきありませんよ。』

どうやら、その声の主からは、春香の様子が見えるらしい。

夢を早く覚まして、両親に謝らなくちゃと思い、目を閉じた。

『夢じゃないですよ。あなたは実際に過去の両親に会った。

そして、あなたを思っている両親から、その手にしている2つの鍵を受け取ったのです。』

「なんなのこれ！私早く帰らなきゃ！謝らなきゃ！」

春香は叫んだ。

『まだ帰れませんよ。鍵が揃っていないでしょう？

あと3つ。扉を開けるには、鍵が必要です。

鍵を開け、願いがあんならその奥で言うといい。』

春香は石の扉に近づき、押したり引いたりしてみるが、びくともしなかった。

扉の中央には、丸い穴が5つ開いていた。

そのくぼみに触れると、左手で持っていた玉がすっぽり吸い込まれるようにはまった。

まるで電球のように、赤と青の玉が、扉のくぼみの中で光り輝く。

だがまだ扉は開かない。

「出して！私帰らなくちゃいけないの！」

『3つ目の鍵を探しに行きますか？』

声の主はそう繰り返すだけだった。

夢じゃないのか夢なのか、よくわからないけど、
とりあえず鍵を探さなきゃいけないみたいだった。

「探します。」

そう言った瞬間、足元がグラリと揺れたような気がした。

目の前が真っ暗になり、気づくとどこかの部屋の中に立っているようだった。

この部屋どこかで見た事ある…。

第三章 思い思い

亜由美の部屋だった。

ティディベアが大好きで、そこかしこにティディベアが並んでいた。

亜由美の部屋に入るのは久しぶりだった。

中学2年になった頃から、亜由美の家に行こうとすると、

何かと理由を付けて断られていた。

そんなに月日はたっていないけれど、なんだか懐かしい気分になった。

小さなチェストの上には、春香がプレゼントしたティディベアがちょこんと座っていた。

「あ、これ去年贈った子だー。」

春香がティディベアに触れようとした時、部屋の外から大きな怒鳴り声が聞こえてきた。

びっくりして飛び出そうとしたが、部屋に勝手に入ってきちゃってるわけで...

外に出て話す言い訳も思いつかず、

とりあえず部屋の外の様子が一番わかりやすそうなドアのところでしゃがみこんだ。

「うるせーって言ってんだろ?!」

怒鳴り声は男性の声だった。亜由美に兄弟はいないので、多分お父さんだと思う。

怒鳴り声の後、間髪入れずにガラスが割れる音がする。

「やめてください！やめて！」

泣き叫ぶような悲痛な声が聞こえる。

これは亜由美のお母さんの声だった。

どこか違う部屋で何かが起きているのは間違いなかった。

またガラスの割れる音が聞こえる。

春香は思わず部屋を飛び出して、亜由美の母がいるであろうその部屋を探した。

どうやら居間のようなようだった。

廊下から居間へ入ると、亜由美の母親が床に座って泣いていた。

そこから少し離れたダイニングの椅子に座り、酒を飲んでいるのは、

亜由美の父親だった。

部屋は薄暗く、まるで泥棒でも入ったかのように散らかり、

ところどころに割れたガラスの破片が落ちていた。

テーブルの上やそこかしこに酒ビンが置いてあり、部屋の中もお酒の匂いが充満している。

泣いている亜由美の母を睨み付けると、手元にあったコップを床にたたきつけた。

亜由美の母の元に破片が飛び、どこかを切ったのか、血の滴が床にはらりと落ちた。

「おばさん！」

思わず駆け寄ったが、亜由美の母親は振り向きもしなかった。

「大丈夫おばさん？」

そう言いながら、亜由美の母の肩に手をかけようとしたとき、はっとした。

春香の手は、亜由美のお母さんの肩には触れずに、すーっと突き抜けた。

「え？」

もう一度触れようとしたが、空を切るばかりで、春香の手は何に触れることもなかった。

「あれ？」

周りに落ちているガラスのかけらを拾ってみようとしたが、つかむことができない。

椅子に座ろうとしても、椅子に触れることができないので、地べたに尻もちをついてしまった。

「私、透明人間??」

その時、玄関のドアが開く音がした。

ただいまとも言わず、廊下を歩いていくのは亜由美だった。

春香は亜由美について行った。

「亜由美？」

一応声はかけてみたが、亜由美は振り向くことはなかった。

春香は自分の声が届かず、姿も見えないことを確信した。

時計を見ると22時、ずいぶん遅い帰宅だ。

亜由美は部屋に入るとベッドに座り、持っていたコンビニの袋からおにぎりを取り出して食べ始めた。

黙ったまま、真っ暗な部屋の中で、亜由美はどうしたというのだろう。

ふと、上を見ると、電気が割れていて、つけることが出来なくなっていた。

これもお父さんが...?

状況がよくわからなかった。

亜由美の両親は、参観日や親子遠足の時には揃って必ず来ていたし、

運動会や学芸会の時には、二人揃ってビデオカメラを持って、

亜由美の事を追っかけまわしていた。

両親が揃って来てくれることがなかった私には、とてもうらやましかった。

春香が泊りに来たときも、夕食時の熱々カップルぶりに、

亜由美が気恥ずかしくなって、もうやめてよ～と言うほどの、仲睦まじさだった。

お掃除好きなおばさんがいつも綺麗にしていた居間は、見るも無残な状態だ。

ベランダに見えた鉢植えは全て枯れ果てていた。

亜由美の母親は、何度もケガを重ねているのか、まだ新しい傷、古い傷がそこかしこにあった。

顔には殴られたような大きな痣もできていた。

なんでこんなひどい事になっているんだろう。いつから...?

確か、亜由美が家に入れてくれなくなったのは、中学2年になったときからだった。

もしかしたら、そのころからこんな状態だったんだろうか?

だとしたら、どうして私に相談してくれなかったんだろうか。

亜由美はもうそのころから、私を友達だとは思ってくれていなかったんだろうか。

どれくらい時間が経っただろう。

亜由美は食べ終わっても、ベッドに座って、ただ宙を見つめているだけだった。

すると、廊下から足音が近づいてくる。

亜由美の部屋のドアが開き、父親が入ってきた。

亜由美はビクリと肩を揺らしたが、そのままじっと座っていた。

父親は部屋の鍵をかけ、亜由美に近づいてくる。

ものすごいお酒の匂いがしている。

ベッドまで来ると、座っていた亜由美をベッドに寝かせ、服を脱がせ始めた。

春香は慌てた。小さな子供じゃあるまいし、着替えなんて自分でできるはず。

「ちょっと！おじさんやめて！何してるの?!」

春香が叫ぶが、当然相手の耳には届かない。

突き飛ばそうと手を伸ばすが、春香の手は何にも触れることなく突き抜ける。

下着までもを剥ぎ取ると、亜由美の父は亜由美に覆いかぶさり、

キスをし、体に触れ…。それは紛れもなく性行為だった。

春香は目を背けた。父親が娘にそんな事をするなんて…。

悍まし過ぎた。

「やめてください！そんな事しないで！亜由美！亜由美一！！」

春香は泣きながら必死に訴える。だが声が届くことはなかった。

春香はその場で泣き崩れた。

亜由美は一言も発しなかった。

おじさんのお酒の匂いのする激しい吐息の音と、

ベッドのシーツに肌が擦れる音、

そして、肌の擦れ合う音だけが、暗い部屋の中に響いていた。

しばらくして、亜由美の父は小さなうめき声をあげ、

そのまま亜由美の体を離れると、自分の衣服を直し、何事もなかったかのように部屋を出た。

亜由美はその姿のまま携帯電話を手に取ると、何か文字を打ち始めた。

打ち終わると携帯を乱暴に投げ置き、シーツを体にくるむと、部屋を出て行った。

投げられた携帯は、春香にぶつかった。

「いたっ…」

痛い…って、あれ？ぶつかった？

落ちた携帯電話を拾い上げた。手に取ることが出来た。

一瞬ためらったが、亜由美ゴメン！と心の中でつぶやき、携帯電話を開いた。

メールの送受信履歴の中には何もなかった。

ただ、下書きの中にはすごい数のメールが保存されていた。

下書きフォルダを開く。

それは全て、春香宛てのメールだった。

最初のメールは2012年4月。

『修学旅行前の健康診断の結果が届いたんだけど、私、血液型AB型だったの。

お父さんもお母さんもA型なのに、私がAB型っておかしいよね？

もしかしたら、私本当の子供じゃないのかも(´；ω；`)]

同じ内容のメールが、何日もの日付で保存されたままになっていた。

なんで送信されなかったんだろう。なんで言ってくれなかったんだろう。

5月の日付になって、違う内容のメールが出てきた。

『帰ったら、お父さんとお母さんが言い争いしてて、

部屋の中がめちゃくちゃになってた。

お母さんケガしてて、私が近寄ってもあっちに行ってなさいって言うだけで。

なんか怖いよ。どうしよう。』

そしてその日の夜にもう一通。

『お酒臭いお父さんが部屋に来てね。

私やめてって言ったんだよ。

でも、いっぱい叩かれて、押さえつけられて。

怖かったよ。

痛いよ。

赤ちゃん出来ちゃったらどうしよう...』

そして次の日には、

『またお父さんが来た。

何を言っても抵抗しても、押さえつけられて叩かれるだけで。

諦めてじっとしてたら、叩かれなかった。

目をつぶってじっとしてたら、

お前にはもう、生きる権利も死ぬ権利もない、覚えておけ！と言われたよ。

私どうなっちゃうんだろう。

春香に相談したい。メール送信してしまいたいけど、

こんなこと言えない。恥ずかしいよ。

汚い子だって思われちゃうよ。』

その日からもう、日記のようになっていた。

『今日もお父さんが来た。

お母さんに、お父さんがしてる事がばれた。

お母さんは狂ったようにお父さんに喚き散らしていたけど、

お母さん、殴られて気を失ってた。

このままじゃ、お父さんに殺されちゃうかもしれない。』

『家に帰るのが怖い。
さっき春香の家の前まで行ったけど、
春香は家の手伝いで忙しそうだった。
もうじき期末テストもあるし、きっと勉強も忙しいと思う。
しばらく外にいたけど、
私はやっぱりあの家に帰るしかないんだ。』

『今日も春香の家に来てしまった。
少し離れた所でお客さんが入って出ていくのを見ていた。
出てくるお客さんは、みんな幸せそうだった。
忙しそうにしてる春香のお父さんやお母さんも、
春香もすごく幸せそうでうらやましい。
お店の明かりが消えると、春香の部屋の明かりがつく。
そこからまた遅くまで電気は消えない。
頑張ってるんだな...。』

『期末テストの結果がでた。
春香は学年トップだった。すごいなあ。
毎日春香が勉強してる部屋の明かりを見てたから
自分も一緒に頑張った気がして嬉しくなった。
でも、試験の結果は私は惨敗。
そして生理がきていない。
最近ちょっと体調も悪い。
それがどういう事なのかわかってる。
どうしよう。
もうしんじやいたいよ...。』
そんな...。
春香は愕然とした。自分の不甲斐なさに腹が立った。
涙が止まらなかった。
毎日のように亜由美が家の前に来ていたことに気づいていなかった。
どんな思いで部屋の明かりを見ていたんだろう。
ただ何時間もずっと...。
こんなに悩んで苦しかったのに、知る由もなかった。
知ったからと言って、何ができるかわからないけど、
私が気付いて、家のドアを開けていたら、苦しみが少しは楽になっていたんじゃないか。
相談してくれたんじゃないか。
親友の亜由美を少しも助けられてなかった事が悔しかった。

そして、7月13日。亜由美の言葉を聞いた日の日付だった。

『春香にトイレでの会話を聞かれた。

八つ当たりだった。

あんなこと全く思ってなかった。

しんじやいたいのは私の方だった。

あんなにいじめられても笑ってて、

家に帰れば優しい両親がいて、

妬ましかった。

助けてほしかったのに、相談したかったのに、

眩しすぎて言えなかった。

汚れた自分の事なんて話せなかった。

ごめん春香。ごめんなさい。』

7月14日。

『ごめんなさい。

あんなこと言うつもりじゃなかった。

ごめんなさい春香。』

その日からは、ずっとその言葉だけが綴られていた。

なんで気づいてあげられなかったんだろう。

自分の事ばかりでいっぱい、

亜由美の様子がおかしかったことに気づいてあげられなかった。

少しずつ痩せてきた亜由美、夏に向けてダイエットしてるんだって笑ってた。

体調が悪いつて言ってた時も、昨日食べ過ぎたなんて言ってた。

少しずつ様子がおかしくなっていたのに、気づいてあげる余裕がなかった。

あんなセリフ言わせちゃったのは私だ。

親友なんて勝手に思ってただけで、

相手の事何一つ気づいてあげられないなんて。

友達失格だ。

そして、さっきベッドで亜由美が打っていたメールも、

『ごめんなさい、春香。』

と書かれていた。

自分があんなにひどい目にあって、あんなに辛くて苦しいのに、

亜由美は自分が傷つけたと思う私に対して、謝り続けている。

亜由美を助けてたい。私に何ができるだろう？

その時、手にしていた携帯電話がぽーっと白く光りだし、吐き出されるように、オレンジ色の球体が転がり落ちた。

「鍵...！」

春香はそれを拾いあげた。

すると、また足元がぐらりと揺れるような感覚に襲われた。

目の前が光の渦で白くなっていく。

眩しくて目を細めると、そこはあの白い空間だった。

目の前には扉がある。

春香は駆け寄り、くぼみにオレンジの鍵を押し当てた。

玉は吸いこまれるようにくぼみにはまる。

扉をそのまま押したが、やはり開かなかった。

「お願い開けてよ！亜由美を助けたいの！帰りたいの！
もとの所に帰してよ！」

『4つ目の鍵を探しに行きますか？』

またあの声がする。

鍵を揃えない事には、出ることはできないようだった。

声の主に従うしかなかった。

「探します！」

足元が揺れ、光に包まれるような感じがした。

どこかに落ちる感覚とともに、体に激痛が走った。

「いた・・・っ・・・」

周りを見渡したが真っ暗で何も見えない。

見上げると、上の方から月明かりがさしている。

どこかの穴の中に落ちたようだった。

第四章 護るもの

穴を登ろうとしたけれど、壁に手をかけると、
かけたところから壁が崩れてどうにも上ることができない。
ここがどこなのかもわからず、不安になってくる。
誰かいませんか？と、穴の中から叫んでみたけれど、
外に人の気配を感じなかった。
諦めてしゃがみこんだ時、突然視界が真っ暗になった。
今までほんのわずか入ってきていた月明かりが、何かに遮られたのだ。
「どこから聞こえるのかと思ったら、こんなところだったのね。」
聞き覚えのある女の子の声だった。
その女の子は、穴の中に手を伸ばすと、私をひょいっと抱き上げた。

え？抱き上げた？！ 驚きの行動に春香は戸惑った。
持ち上げられた春香は、その女の子の腕の中にすっぽりと収まっていたのだ。
そして、月明かりに照らされて、自分の体がはっきりと見えた。
ふさふさの尻尾と、ぷにぷにの肉球...。
え、なに？なに？犬？？犬になっちゃったの？！
そして、自分の姿に驚く間もなく、さらに驚いた。
春香をを救出したのは、あの伊坂香澄だったのだ。
咄嗟に身を引き、腕から飛び出そうともがくも、ぎゅっと抱きしめられた。
「危ないよー。暴れたら落っことしちゃうわよ。」
聞いたこともないような優しい口調で香澄は言った。
犬が春香だという事はわからないようだった。当然だ。

1年の時から同じクラスではあったが、あまり話したことはない。
すごいお金持ちで、いつも取り巻きの女子を何人か連れていた。
お昼はとても豪華なお弁当を持ってきていて、取り巻きと一緒に食べていた。
勉強がすごくできて、いつも学年トップの成績だった。
1年間同じクラスでいたけれど、彼女に対して知っていることはこれくらいだった。
別世界の人という表現が、一番しっくりくる。
同じ教室で机を並べていても、香澄の周りだけ空気が違って見えた。
あの日、私が期末テストで学年トップを飾るまでは、声をかけられた記憶もない。

あの次の日からの私に対するいじめはひどかった。
香澄が直接手を下したわけではないけれど、命令しているのは香澄だった。
思い出すだけで、心臓がキューっとなるような思いだ。

毎日、次は何をされるのか怖かった。

そんな思いが巡るからなのか、小さな犬の体は、小刻みな震えが止まらなかった。

香澄に何度も大丈夫？と声をかけられ背中をさすられた。

しばらくそうしていたが、私を抱きかかえたまま香澄は歩き始めた。

どうやら家に連れて行かれるようだ。

香澄の家は、まるでお城と言うよりは、要塞のようだった。

広大な敷地と、それを囲むように張り巡らされた高いコンクリートの壁。

そして、大げさなくらい大きな扉の門は、監視カメラのようなものが何台もついていて、入口の横には二人の警備員が立っていた。

香澄に気付くと、警備員は深々とお辞儀をし、「おかえりなさいませ。」と言い門を開ける。

香澄は軽く会釈だけをして、門の中に入っていく。

門をくぐると、家の前の門までは、さらに距離があった。

そこから見える庭は、立派な公園のように整備されていて、

おとぎの国にでも入り込んでしまったかのようだった。

門を入ってから四人の人とすれ違った。

庭を掃除している風の人や、何か物を運んでいる人、そして警備員。

どの人も香澄を見つけると、小走りに走り寄ってきて、深々と頭を下げ、おかえりなさいませと言う。

そして、香澄はどの人にも同じように、一言も発さず、ただ軽く会釈だけをして通り過ぎる。

しばらく歩くとやっと入り口の門にたどりつく。

香澄が着くのを待っていたかのように、扉は開かれる。

扉を開けた二人の男性にも同じように会釈をして通り過ぎる。

家に入ると、そこはどこまでが玄関なのかわからないような大きなホールになっていた。

子供のころに読んだお姫様が出てくる物語の舞踏会のシーンに出て来そうな広間だ。

正面の大きな階段を、私を抱きかかえたまま登って行く。

すると、後ろから初老の少しこぎれいな服を着た女性が声をかけた。

「おかえりなさいませお嬢様、その手にしていらっしゃるものは？」

明らかに場違いな野良犬を、少し怪訝そうな顔をして見ている。

「飼うの。」

香澄はそう一言で答えた。

えー、私飼われるの？ここで？この人に...？

全身全霊で拒否をしたかったが、私に選択権はない。

「ですがお嬢様、奥様が・・・」

女性は何かを言いかけたが、香澄は聞く耳を持たずそのまま階段を駆け上がった。

香澄の部屋らしき場所にたどり着いた。

私の部屋の何倍もありそうな大きな部屋。大きな窓と、大きなテラス。

部屋の中には、専用のバスルームまでついていた。

そのバスルームに直行された。洗われるようです。

お風呂から出た私は、すっかり夢心地だった。

高級ホテルのような立派で広くて綺麗なバスルーム。

そこで、香澄は本当に丁寧に私を扱ってくれ、いい香りのボディークリームで念入りに洗われた。

上がった後も、丁寧に熱くないように、ドライヤーの熱を何度も調節しながら、ゆっくり乾かしてくれました。

ブラッシングもびっくりするほど気持ちがよく、仕上げには甘い香りのパフューム。

真っ白なレースのリボンを首に巻かれ、「首輪の代わりね。」と優しく言った。

意外な一面を見た気がした。こんなに優しい声で話すのを聞いたことがなかった。

もちろん、こんなに優しい表情も初めて見たと思う。

ベッドの上で一緒に寝転んで、頭をなでられていると、さっきまで心につっかえていた香澄への恐怖など、

これっぽっちも残っていなかった。

と、その時急に部屋の扉が大きな音を立てて乱暴に開いた。

スーツを着た40前後位の女性が立っていた。

「香澄さん、それはなんですか？」

犬の私に対して、敵意しか感じない目でこちらを指差す。

「私の犬です。」

香澄はきっぱり答える。

「犬なんて飼っていいわけないでしょう？ 何かバイ菌でもあったらどうするんですか？」

「噛みつかれたらどうするんですか！？」

口調は丁寧だけど、明らかに怒っている。

「大丈夫です、こんなに綺麗にしましたし、こんな小さな犬に噛まれたところで、蚊に刺されるほどの痕さえ残らないわ。ほら、こんなに可愛いよ。」

香澄は私を持ち上げると、その女性の前に差し出して見せた。」

女性は一歩退き、恐怖の目で私を見る。

この人は犬が嫌いなのね、とピンときた。

「犬なんかにかまっている暇があるんですか？こんなことで成績でも下がったら、

お父様にどう説明するの？」

さらに一歩下がって女性はそう言った。

「成績だって下がらないわ！」香澄はそう言ってさらに女性のそばに犬を近づける。

女性はさらに数歩下がって、

「いいでしょう、次の期末テスト、少しでも成績が下がるようなことがあれば、

その犬は処分しますからね！」

そう言い捨てて扉をまた乱暴に閉めていった。

「お母様は、わんちゃん苦手なんですよー。」

香澄は私にそう言い、またベッドに寝転んだ。

撫でられる頭の心地の良さに、いつしか眠りについていた。

何が困ったかと言うと、食事だった。

姿は犬だけれど、気持ち的には人間なので、あのカリカリのドックフードをお皿に出されても、どうにも食べることが出来なかった。

困った顔をして、温めたミルクを出してくれたが、ミルクだけではおなかがイマイチ膨れない。

香澄のおやつに出ていたクッキーを何とかしてもらうことに成功して、

クッキーとミルクで、食生活はしのいでいくことにした。

クッキー好きという事になって、名前はクッキーと名付けられた。

香澄の生活は、かなりハードスケジュールだった。

学校から帰ってきても、次々に家庭教師がやってくる。

ピアノのお稽古、バイオリン、絵画、茶道、華道、書道、5教科の勉強、礼儀作法、料理、

英語、フランス語、中国語、食事以外の時間は、ほぼ何かしらの家庭教師がいる状態だった。

そんな中でも、少しの時間を見つけてはお庭に連れてってくれ、

朝はすごく早起きをして、たっぷりお庭で散歩させてくれた。

一人になると、香澄は色々な話をしてくれた。

私は行ったことがないような、遠い国々の話、本の話、動物の話。

そして、両親の話。

香澄の家は、皇族血筋の名家で、父親は外交官をやっているそうだ。

世界中を飛び回っていて、家族揃って食事をすることは年に数回だそうだ。

一人娘で将来は、この家柄とともに、父親の仕事も継がせたいと、

幼いころから英才教育を施されてきたようだった。

そんな風に、犬にならなければ知りえなかった話はたくさんしてくれたが、

その話の中に、香澄の感情が出てくることはなかった。

普通だったら、話の中にあるだろう、楽しい、嬉しい、悲しい、そんな気持ちの描写はどこにもなかった。

そして、学校の話も一つも出てこなかった。友達の話も。

あんなにたくさんのクラスメートに囲まれて毎日を過ごしていたのに、

そんな話が何も出てこないことが不思議だった。

この家に来て何日が過ぎたのだろう。

あまりの居心地のよさに、元々犬だったような気さえしてきていた。

この家に来たときよりも、外は暑くなってきている感じがした。

香澄が学校へ行っている間は、一人で部屋でお留守番だ。

いつものように、ソファにうずくまってうたたねをしていた。

そのとき、部屋のドアが大きな音を立て乱暴に開き、2人の男性が入ってきた。

後ろには香澄の母親が立っている。

「それよ、その犬。連れて行って頂戴。」

私は飛び起きて、部屋の中を右往左往逃げ回るが、結局取り押さえられてしまった。

後ろから香澄が走ってくる。

「お母様お願い！もっとがんばるから！クッキーを連れて行かないで！」

泣きじゃくりながら懇願するも、背の大きな男性につかまれていて、その場から身動きすることもできないようだった。

「あなたが犬を飼うと言ったとき、私と約束しましたね？私は約束を破ってはいませんよ？」

香澄の母親はそういうと、手にしていた答案用紙と、成績の順位表を香澄の部屋に投げ捨てた。

期末試験の順位表、春香が1位、香澄が2位。

順位は私のほうが上だったけど、決して香澄の成績が下がったわけではなく、

むしろ、得点自体はあがっているのだ。

今回は春香がいつもよりもがんばってしまったにすぎない。

だが、2位という結果は、香澄の母にとって納得のいくものではなかった。

男たちは何事もなかったように私を連れて外へ出る。

香澄は今到着した家庭教師とともに、そのまま部屋の中に連れて行かれた。

私は男たちに抱えられて、外に出た。

「処分っていったってなあ？」

「さすがに奥様の命令でも、生き物殺すのはちょっとな？」

「ちょっと離れたところに捨ててくればいいんじゃないか？」

そういうと、二人は私を車に乗せ、しばらく走らせ、公園らしきところに着くとダンボールに入れて置いていった。

男たちがいなくなるのを確認して、外に出る。

全く見たこともない場所だった。

とにかく、香澄の家の方向だろう方へ向かって歩き出した。

子犬の足では、そう遠くまで歩けない。何度も夜を迎え、朝も迎えた。

途中子供たちにおやつをもらったり、公園で水を飲んで空腹を満たした。

けれど、一向に見たことのある場所にたどり着かない。

道が合っているのか間違っているのかもわからない。

もしかしたら、全く違う方向に歩いているかもしれない。

だけど、私は、信じた道に向かってただ歩くことしかできなかった。

何日歩いたことだろう、おいしそうなおいにつられて、ふらふらと歩いてきてしまった。

道路の反対側、少し離れたところに食堂が見えた。

春香の両親の営んでいる食堂だ。

いつもより目線が低かったので、景色が違って見え、近所にいることに気づけなかったのだ。

そのとき、香澄の姿が見えた。香澄がお店の中に入っていく。

え？

香澄がたずねてくることなんて、ありえないことだった。

食事するにしても、こんな町の食堂に香澄がくるはずがない。

となると、私に用事があったとしか思えなかった。

食堂前の道路は交通量が激しく、子犬の私にはなかなか渡ることができない。

店の中が見えるように、移動して、遠くから必死に中をのぞく。

香澄は席に座りもせず、立ったまま春香の両親と話をしているようだった。

声なんて聞こえないし、なにを話しているのかわからなかったけれど、香澄は泣いているようだった。

私を探しているんだろうか？

しばらくすると、香澄がお店から出てきた。

何度も何度も店の中の両親に頭を下げながら出てくる。

扉が閉まりきったところで、私と目が合った。

「クッキー？」香澄が呼ぶ。

私は思わずそのまま道路に飛び出して香澄の元へと走り出した。

「クッキーだめ！！」

香澄の叫び声とともに、車のブレーキ音が鳴り響いた。
体にすごい衝撃と激痛が走り、一瞬にして目の前が真っ暗になった。

気づくと、病院らしきにおいと、香澄の泣きながら謝る声が響いていた。
「ごめんなさい、ごめんなさい！ 全部私が悪いの、ごめんなさい！」
その声が次第に遠くなっていき、私は何も答えることができないまま、意識が遠のいていくようだった。

そしてあの光に包まれた部屋にまたたどり着く。
手には黄色い玉が握り締められていた。
「あ、人間に戻ってる……。」
春香はゆっくりと扉の前に近づき、黄色い玉をくぼみに押し当てる。
玉はすうっと扉に引き寄せられ、ぴたりとはまった。
「ふう……。それで後ひとつってことね。探します！」
声が聞こえてくる前に、春香は答えた。
目の前が真っ白になり、ふわっと浮くような感覚に襲われた。

第五章

目を開けると、ものすごい量のせみの声と、涼しげな風鈴の音、
むせ返るような量の匂いと、額に当てられた冷たいタオル。

懐かしい感じに包まれて、私は飛び起きる。

「あらあら、まだ起きてはだめよ。」

やさしい声ができる。おばあちゃんだ。幼いころに亡くなったおばあちゃん。

なんとなく雰囲気は覚えている。

夏休みになると、数日一人でこの家に遊びに来ていた。

自分の手足を確認する。小さい。たぶん幼稚園位の自分だ。

話したいことはたくさんあったけど、うまく言葉が出ない。

「うにゃにゃりの・・・。」

なにを言ってるんだ私は・・・。

おばあちゃんは、にこにこしながら頭をなでてくれる。

「まだお熱下がってないから、もう少しねんねしてましようね。」

そういいながらゆっくり寝かせると、額にタオルを当ててくれた。

このだるさは、暑さのせいではなく、熱があるためのようだった。